介護相談員の声

「新しい絆」

介護相談員は、介護保険施設等を訪問し、利用者の方の不安や不満・疑問などを聴き、毎月1回開かれる介護相談員連絡会議で情報交換をしています。

本来、施設における日常生活での出来事は、問題が生じる前に解決しておく事が望ましいと考えられるため、利用者や家族と施設との関係を損なうことなく、共に改善の途を探っていくことが、介護相談員の役目です。

ある日、特別養護老人ホームを訪問した際の出来事です。

壁に面した長机に向かい、車いすに座ったまま、目を閉じ頭を垂れてじっとしている女性がおられました。しばらく様子をうかがっていましたが、その姿勢は変わりませんでした。寝ておられるのかなと思いながら、声をお掛けしようと近付いた私は驚きました。彼女の膝の上に置かれた手の爪のすべてが、異様に長く伸びていたからです。1センチから1センチ半は伸びていたでしょう。

何らかの理由で、彼女自身が爪を切ることを拒んでおられるのでしょうか。

「こんにちは」と声をお掛けしましたが、返事はありません。離れて様子を見ていた際に、もう一つ気がかりがありました。髪の毛も長く伸びているのです。夏に向けてこざっぱりとしたショートヘアーの方が多い中、彼女の長い髪はこの場にふさわしくない感じがしました。何らかの理由があって、髪の毛のカットも拒んでおられるのかしらと思いました。

再度声をお掛けしましたが、彼女は微動だにせず、同じ姿勢で壁に向かって頭を下げ、目は閉じたままでした。

活動後、事業所に今日の彼女の様子を伝え、私が感じたままをお話させて頂きました。

そして私は、彼女の現状を知らされることになったのです。

事業所からお聞きしたのは、ご家族の方から、「毎月決まった費用以外は出費しないでほしい。ようやく施設で預かってもらえたのだから、そちらで迷惑のかからないように」という要望があったということでした。散髪には別途費用が必要だったため、できなかったのです。

彼女が暮らしていた家族との人間関係の中では、「手の爪を切ってほしい」との訴えは、誰に言っても空しいことと感じていたのでしょうか。自分の思いを訴えても届かないと、口を閉ざし、目を閉じ、一切の願いを伝えなくなったのでしょうか。

やっと入所させてもらった施設だからというご家族の思いからは、日常生活の一切の面倒を見てこられたご家族のお世話の大変さを推し量ることができます。

彼女が入所した日。それは住み慣れた家、通い慣れた商店街、仲良くしていた近隣の住民の方々とのお別れの日でした。

彼女と介護職員との間に「新しい絆」が築かれて、目を閉じ口を閉ざしている彼女の心がいつか開かれることを期待したいと思います。

京都市介護相談員　生谷　啓子